

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ウクライナから始めざるをえない。遠い国で突如戦争が始まり、国家の巨大な暴力が市民生活に降り^A そそいでいる。

連日報道されている^① 凄惨な光景は、私たちに痛みや不安を引き起こし、他人事ではないと思わせる。だからこそ、S Nでは平和を求めるメッセージが^I シェアされ、各地で抗議運動が起こり、多額の募金が寄せられているのだろう。私がこうして文章を書いているのもそうかもしれない。遠い国へと糸を伸ばそうとする私たちがいる。

ただし、この糸には一抹の^Ⅰ 《が織り込まれている。糸の向こうには、戦争のただ中において、被害とトラウマに苦しむ当事者たちがいる。《 A 》、私たちはその戦争を我がことのように想像し、糸の先端を彼らにまで届かせたいと願う。《 B 》、糸の手元には、ミサイルも銃弾も飛んでこない安全な場所で、テレビやスマホに映る戦争を見ている私たちもいる。

長く伸びた糸の先端と手元には^Ⅱ 《がある。我がことだと思いつながら他人事でもあること、自分が当事者ではなくよそ者であること。ここにやましさがある。

安易な^② 懺悔をしたいわけじゃない。このよそ者のやましさに、社会に関心を寄せることの、《 C 》あなたが今こうして新聞を読んでいることの「^① ① 」、^③ 葛藤があると思うのだ。

発生から11年となる東日本大震災について、雑誌「こころの科学」3月号に「被災地における中長期のこころの支援」という論文が掲載された。臨床心理士・岩倉拓が10年にわたる福島での支援活動を^B しるし、そこにあつたやましさを^C えがいている。

ポイントは「中長期」にある。その町の住民は地震、津波、放射線被曝^{ひばく}による複合的な被害に加え、長期の避難生活を余儀なくされた。人生そのものを^④ 脅かす破局的な体験だ。したがって、その支援は継続的なかかわりを持ち、人生を定観測できるような息の長いものである必要がある。岩倉は、現地の保健師と協働することで、持続可能な支援の仕組みを構築し、一定の成果を得る。

《 D 》、3年目になると、岩倉は町で親身な支援者をしているときの自分と、関東への帰り道にいるときのよそ者の自分に強烈なギャップを感じるようになる。おりしも、町では外からやってくるよそ者に対する不信感が高まっていた時期であり、住民たちは震災による被害を岩倉に語らなくなっていた。「何のために行っているのか」わからなくなる。

そんなある日、いつも同行してくれていた現地の保健師から打ち明けられる。岩倉の訪問を調整するのに膨大な時間がかかっている。この言葉で岩倉はやましきの正体に気づく。自分の善意が現地の人の負担になっていて、それを我慢させていたこと。これまでも町を訪れては消えていった多くのよそ者たちのように、自分も彼らを傷つけていたこと。自分は支援者でもあるが、《 Ⅲ 》者で、「も」あったこと。

ただし、保健師は次のように付け加えた。「先生がやめる気配がないから」②「を言った」。保健師は関係を続けるために打ち明けたのだ。《 E 》、二人は丁寧な話し合いができた。保健師の《 IV 》を少なくともするため、岩倉は時に一人で町を回るようになり、施設の一角には相談室が設けられた。《 F 》、そこには多様な相談が持ち込まれるようになった。やつと、「中長期」で岩倉を活用できる体制が整えられたのだ。

2018年に大佛次郎論壇賞を受賞した「新復興論」で、小松理虔は復興のためには外部のよそ者が出入りできるような地域作りが大切だと論じていた。遠いところから《 a 》無尽に糸が伸びてくるのが、町ににぎわいをもたらす、硬直化しやすい課題に風穴を開け、地域を未来へと接続してくれる。小松は地域を生きる当事者として、よそ者を受け入れる覚悟を語っていた。

これに対して、岩倉が物語っていたのは地域を訪れるよそ者の覚悟だ。よそ者には加害性がある。そこには温度差が確かにあるし、しばしば無知であり、おせっかいかもしれない。そのことをどこかで自分でも感じているから、やましさが生じ、関わりを継続することを《 D 》あきらめてしまいがち。遠くから伸びる糸ははかない。

それでもやましさに持ちこたえることには価値がある。「先生がやめる気配がないから」②「を言った」保健師の言葉は金言だと思う。共有した時間があるから「②」が言える。「②」が糸の先端と手元にあった温度差を埋めてくれる。よそ者である自分が与えている負担や迷惑について、当事者と率直に話し合い、調整する。これが途切れやすかった糸を少しだけ太く、しぶとくしてくれる。

新聞を《 E 》ながめれば無数のニュースがある。私たちはほんの一握りの問題に対しては当事者だが、ほとんどの問題に対してよそ者だ。それでも、よそ者は遠いところまで、《 G 》ウクライナにまで糸を伸ばすことが出来るし、その糸を未来まで続くように《 F 》きたえることも出来る。そういう糸でグルグル巻きにされているものを、私たちは「社会」とか、「世界」と呼ぶのだと思う。

（東畑開人「よそ者のやましさを抱えて」《 b 》「は届く、戦禍の国にも」

問一 傍線部①～④の漢字の読みを答えよ。

問二 傍線部A～Fの漢字を答えよ。

問三 《 A 》 《 G 》 に最適な語をそれぞれ記号で答えよ。ただし、同じ語を二回以上使ってもよい。

ア しかし イ すると ウ だから エ たとえば オ つまり

問四 《 I 》 《 IV 》 の中に入る最適な語を、本文中から抜き出せ。

問五 「 ① 」 と 「 ② 」 には、次の語群のいずれかの語の対義語が入る。最適な語を漢字で答えよ。

具体 時間 建前 特殊

問六 傍線部Iの「シェア」と同じ意味の語を、《 F 》より後の本文中から、二字で抜き出せ。

問七 《 a 》に入る最適な一字を答えよ。

問八 本文全体を内容の面から三段落（ブロック）に分け、二段落目と三段落目の最初の五字を抜き出せ。

問九 《 b 》に、本文中から最適な一語を抜き出し、タイトルを完成させよ。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

私たちはこの3ヶ月、ウクライナでの悲惨な戦いをテレビの報道などで目にしてきた。そもそも、こんなに多くの兵器があるから戦争の規模が《 A 》し、犠牲者も増えるのだと感じている方もいるかもしれない。

確かに現代兵器は先端的な科学技術に大いに「 I Ⅰ 」しており、^①広い意味で科学技術政策の対称でもある。

「 ① 」今回は、そのような軍事技術と、科学者や技術者、また大学との関係について考えてみたい。

軍事技術に長けた古代国家と言えば新アッシリアが有名だが、すでに「工兵」に相当する存在が戦場で活躍していたという。古代ローマでも、要塞の建設や投石器の活用など、戦場での課題を技術的に解決することで戦闘を有利に導いていた。

一方、中世の中国で発明された火薬は、遅くとも12世紀には戦場で使われた記録がある。そして13～14世紀ごろに欧州にその製造方法が伝わった。これを「 II Ⅱ 」に銃砲が作られるようになり、その後の戦争の形を大きく変えていく。

「 ② 」欧州では近代科学が動きだし、また産業革命が起こって西欧世界の近代化が急速に進んだ。

とはいえ、科学技術と戦争が本格的に結びついたのは20世紀の第1次世界大戦からである。参戦国において、はじめて科学者共同体が戦争「 III Ⅲ 」のために組織的に動員され、軍事技術のみならず、軍需物資の補給にも《 B 》に活用された。

「 ③ 」これは政府が一方的に科学者たちを「徴用」しようとしたわけではない。当時の職業軍人は、新しい科学技術には「 IV Ⅳ 」的であることが多かった。「 ④ 」参戦国の指導的な科学者の中に、科学技術動員を通して、政府に対して科学技術の制度化や予算《 A 》を働きかけようとした者がいたことは、確認しておくべきことかもしれない。

*

そのような科学技術動員の「成果」としては、第1次世界大戦では毒ガスが、また第2次世界大戦では原爆やリーダーなどが有名である。

だが大戦後は、とりわけ核兵器の非人道性が科学者たちを動揺させ、東西冷戦時代の到来とともに「科学者の社会的責任」の議論が広まっていく。核兵器廃絶と科学技術の平和利用を世界に訴えた、有名な「ラッセル・アインシュタイン宣言」も^②この文脈の中で決議されたものだ。

日本では戦後民主主義的な^③価値観の浸潤により、軍事研究には関わらないことが大学や科学者の基本的な姿勢として定着していった。だが近年、その《 C 》が揺らぎ始めている。その直接の「 II Ⅱ 」となったのが、2015年

の防衛装備庁による「安全保障技術研究推進制度」の創設であろう。軍事目的の研究費を大学に直接つける経路が出来たとして、批判を浴びたことは記憶に新しい。

当然ながら、私たちはこれを広く政治の問題として真正面から考え続けるべきだろう。だが、一方で、そもそも軍事技術とそうでない技術の区別が《 D 》な時代に入ったという点も指摘しておく必要がある。一般にそのような両義的な技術を「デュアルユース技術」と呼ぶ。

〔 ⑤ 〕 砲弾を作る技術は、民生転用はしにくいし、子供の積み木を軍事兵器にするのは現実的ではない。だが実際のところ、ほとんどの技術はその中間の《 a 》ゾーンに位置する。

とりわけ、ITやバイオテクノロジーなどの先端的な領域では、基礎研究と応用研究の区別が曖昧であり、一般的な基礎研究から直接、軍事的な利用が可能になるケースが出てきている。そのため、応用研究だけを監視・規制すれば済むというものでもない。大学などでの研究のどれが軍事転用の可能性があるのかは、今や簡単には判断がつかないのである。

*

また、防衛装備庁の予算について議論になったような、「お金の出所」で技術を色分けする考え方は、デュアルユースの観点からすると、必ずしも有効ではない面もある。むしろ、研究成果を一般公開できるかどうか、〔 ⑥ 〕「機密に当たる研究費かどうかの方が、本質的な分岐点になるという意見も根強い。

実際、米国では「基礎研究は公開」という原則をとっており、その条件の下で、国防総省からも多額の研究費が大学に《 E 》《 》されている。また、もし機密に当たる研究を行う場合には、大学のキャンパスと物理的に離れた特別な研究所に限定すると言ったルールが定められている。

〔 ⑦ 〕 一方で、この米国の方式も必ずしも完璧ではない。たとえば成果が公開可能な基礎研究であつたとしても、防衛予算から支出されているということは、なんらかの意味で防衛上、必要な研究であると考えられる。そのような予算に〔 I 〕し続けることは、自由で独立であるはずの大学研究の本来の姿から、徐々に〔 V 〕していく恐れはないだろうか。またもし、政府の研究予算全体の中で、デュアルユース技術も含め、軍事研究の予算が無視できないレベルに増えれば、これは事実上、軍事研究への従事を研究者に強いることを意味する。現在の日本では、まだこの種の予算は小規模にとどまっているが、大学を安定的に運営するための予算が削減されてきたことを考えれば、決して《 F 》《 》はできない。

④ デュアルユース技術をどう扱うかは、今も議論が続いている。日本のみならず、世界共通の課題なのだ。私たちは今後、大学の自治や学問の自由とのバランスを十分注意しながら、よりよい道を〔 VI 〕していくべきだろう。

（神里達博 「軍事技術と科学者と大学 学問の自由とのバランスを」

問一 《 A 》 《 F 》には、次の語群のいずれかの語の対義語が入る。最適な語を漢字で答えよ。

縮小 需要 消極的 悲観 容易 例外

問二 傍線部①の「広い意味」を漢字二字で言い換えよ。

問三 最初の意味段落と最後の意味段落（意味段落の区切りは「*」）には、それぞれ一つずつ漢字の誤字がある。抜き出し、正しい漢字を答えよ。

問四 「 ① 」 「 ⑦ 」に最適な語を次の中から選び、記号で答えよ。ただし、同じ語を二回以上使ってもよ。

ア さらに イ しかし ウ そこで エ たとえば オ つまり カ むしろ

問五 「 I 」 「 VI 」に最適な語を次の中から選び、漢字で答えよ。

いぞん いっだつ かいぎ けいき すいこう もさく

問六 傍線部②の、「この文脈」とは何か。本文中から十字程度で抜き出せ。

問七 傍線部③に「価値観」とあるが、「観」の意味を五字以内で答えよ。

問八 《 a 》に最適な語を五字以内で答えよ。

問九 傍線部④「デュアルユース技術」とは何か。本文中の語句を用いて、七字以上十字以内で答えよ。

三 アライグマの足跡（A）と比較して、アナグマの足跡（B）の特徴を五十字以上、六十字以内、二文で述べよ。

A



前足



後足

B



前足



後足